



応答詞による応答について：呼掛に対する応答の場合

著者	六城 雅章
雑誌名	日本文藝研究
巻	70
号	1
ページ	49-72
発行年	2018-10-30
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027338

応答詞による応答について

——呼掛に対する応答の場合——

六 城 雅 章

一 はじめに

感動詞は、橋本（一九三四）による品詞分類において「主語になる事なく、他の語を修飾し又は接続する事もない。又他の語によつて修飾接続せられる事も無い」と述べられるように、「すべての観点で消極的に分類され」⁽¹⁾るのが一般的であるが、筆者は、拙稿（二〇一六）において、「それ自体が独立して一つの完全な文となり得る」「対象的意味を積極的に欠如した態勢においてもち作用的意味に卓越している」という二つの文法的特徴をともに満たすものとして、感動詞を規定した。

本稿は、「はい」「いいえ」のような、応答に使用される感動詞を、森重（一九五九）に倣つて「応答詞」と呼び、応答詞による応答について、その体系を論じたうえで、それが呼掛に対して行なわれる場合にはいかなる振舞がみられるのか、また、その振舞がいかなる理由によつて生じるのかを論じるものである。

二 先行研究の問題点

応答詞による応答についての最も一般的な理解は、次に引用するような、「肯定」を表わすものと「否定」を表わすものとに大別される、というものである。

・第四種〈応答〉は、自分に向かって話された言語表現に対する受け答えの信号である。大きく肯定系と否定系に分けられ、前者には「はい」「は」「うん」「ええ」「おう」「ああ」「ん」、後者には「いいえ」「いえ」「いや」「いや」「うーん」「うんにゃ」などが含まれる。

（『研究資料日本古典文学』一二の「感動詞」の項、金水敏氏執筆）

・次に停まるのは東京駅？という認否の質問や、「窓を開けてくれ」という依頼を受けた人間が相手に返す「うん」「はい」「いや」「ううん」など、それ単独で認否の受け答えとなる語。肯定系（「うん」「はい」など）と否定系（「いや」「ううん」など）に大別され、肯定系は命題内容（次に停まるのは東京駅である）や「窓を開ける義務を自分が負う」を認定する受け答えとなり、否定形は命題内容^{（マヤ）}を否定する受け答えとなる。

（『日本語大事典』の「応答詞」の項、定延利之氏執筆）

しかし、応答詞による応答には、次のような、「肯定」とも「否定」ともいい難いものが存在する。

（1）a 「いや、電流は流されないようにするんだ。そうすれば神経細胞は焼け切れやしないよ。ねえ、隆夫君、

そうだろう」「さあ、どつちかなあ。ほくは、そのことをよく知らないから、答えられない」(『靈魂』⁽²⁾)

- b 九十歳を過ぎた実家の母は、「ご多分にもれず物忘れがひどい。日ごろは散歩に誘うと」「九十歳になるとえらいんだよ」と拒むくせに、先日、デイケアの面接で担当の先生に「おばあちゃん、いくつになったの?」と聞かれると「さあ」と困惑した表情で、傍らの私に「私、いくつになった?」と聞く始末。(『朝日』)

つまり、「肯定／否定」二大別の分析では、応答詞による応答の全体をとらえられないのである。

また、応答詞による応答については、先に引用した『日本語大事典』の「応答詞」の項が「命題内容」を「認定」あるいは「否定」すると述べるように、その対象を「命題」とする分析がしばしばなされる。だが、応答詞による応答は、次のように、「命題」をもたない文(2a)や言語表現を伴わない行為(2b)に対しても行なわれる。

- (2) a 「おい」「はい」「湯に入ってこい」「お湯はきらいだ」(『宮本』)

- b 次郎は、考える余裕もなく、すぐ第五室に行つて戸をノックした。「はあい。」にぶい大河の返事がきこえた。(『次郎』)

つまり、応答詞による応答は、必ずしも「命題」を対象としてなされるわけではないのである。

以上のように、応答詞による応答について、その意味を「肯定」と「否定」とに大別すること、その対象を「命題」とのみみることに問題がある。それゆえに、本稿では、これらとは異なる観点から分析を行ないたい。

三 応答詞による応答の体系

〈文〉について、『日本語大事典』の「文」の項（大鹿薫久氏執筆）は、「文は「こと」を表現したものであり、それが文の意味である」としたうえで、〈文〉が表わしている「こと」には、「文の形式によって表されている「こと」という側面と、「表現するという行為自体が表している「こと」という側面との、二つの側面があると述べる。そして、応答詞による応答は、これら二側面のそれぞれに対してなされるものと考えられる。

〈文〉がもつ二側面の一つ「文の形式によって表されている「こと」」（以下、〈内容的意味〉と呼ぶ）に対する応答は、次のように、応答詞の使いわけ（応答詞のうち、「はい」を用いるか、「いいえ」を用いるか、「さあ」を用いるか）によって表わされる。

- (3) a 甲「太郎は学生ですか。」 乙「はい、太郎は学生です。」
 b 甲「太郎は学生ですか。」 乙「いいえ、太郎は学生ではありません。」
 c 甲「太郎は学生ですか。」 乙「さあ、知りません。」

すなわち、ここでの応答詞の使いわけは、「太郎は学生である」という「こと」に対してなされているのである。また、現代語の応答詞は、かかる使いわけ——その表わす意味の違い——から、次に示すように、大きく三つに分けられる⁽³⁾。

(4) a はい／ああ／うむ／うん／ええ／おう／はあ／はっ／へい／はい

b いいえ／いいや／いえ／いや／ううん

c さあ／うーむ／うーん／さて／はて

以下では、論述の便宜のため、(4 a) (4 b) (4 c) としてまとめられる応答詞の一群を、各分類の代表者から、それぞれ「はい」系・「いいえ」系・「さあ」系と呼ぶことにする。

さて、応答詞の使いわけの詳細についてであるが、まず、「はい」系・「いいえ」系の応答と「さあ」系の応答との間には、〈内容的意味〉に関する、ある大きな相違が存する。それは、前者が〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報 (3 a) (c) の例でいえば、太郎が学生であるかどうかを今現在所有している (＝知っている、わかっている、覚えていいる) 場合の応答であるのに対して、後者は〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有していない (＝知らない、わかっていない、覚えていない) 場合の応答である、という相違である。なお、〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有しているものの、知らないふり、わかっていないふり、覚えていないふりをする場合にも、「さあ」系の応答が可能となるが、これについては、後者の応答と同様に扱う。

次に、「はい」系の応答と「いいえ」系の応答との違いであるが、これらは、先述のように、一般には、それぞれ「肯定」「否定」を表わすものと考えられているようである。しかし、次に示す例の、一重傍線部と二重傍線部との関係を見てわかるように、「はい」系の応答は述語における肯定 (ゝデアル) との対応関係をもたず、「いいえ」系の応答は述語における否定 (ゝデナイ) との対応関係をもたない。

- (5) a 甲「太郎は学生ですか。」 乙「はい、太郎は学生です。」
 b 甲「太郎は学生ではありませんか。」 乙「いいえ、太郎は学生です。」
 c 甲「太郎は教師ですか。」 乙「いいえ、太郎は教師ではありません。」
 d 甲「太郎は教師ではありませんか。」 乙「はい、太郎は教師ではありません。」

それゆえに、本稿では、「はい」系・「いいえ」系の応答が表わす意味に関して、「肯定」「否定」という用語を使用することは避ける。そして、その代わりに〈同意〉〈不同意〉という用語を使用したい⁽⁴⁾。(5a)の「はい」が「太郎は学生である」という「こと」に対する〈同意〉を表わし、(5d)の「はい」が「太郎は教師ではない」という「こと」に対する〈同意〉を表わすと考えれば、後続の述語がそれぞれ「太郎は学生です」「太郎は教師ではありません」と「太郎は教師である」という「こと」に対する〈不同意〉を表わし、(5c)の「いいえ」が「太郎は教師である」という「こと」に対する〈不同意〉を表わすと考えれば、後続の述語がそれぞれ「太郎は学生です」「太郎は教師ではありません」と「太郎は教師ではない」という「こと」に対する〈同意〉と考えることができる。このように、〈内容的意味〉としての「こと」に対する応答として、「はい」系・「いいえ」系の応答がそれぞれ〈同意〉〈不同意〉を表わすと考えれば、「肯定」「否定」という用語が抱えていた述語との対応に関する齟齬が解消されるのである。

ところで、(3a~c)や(5a~d)における応答詞の使いわけは、甲の発した疑問文の〈内容的意味〉に対するものであるが、かかる応答を行なうためには、まず以て、応答の主体である乙が、甲の「質問する／問い掛ける」という行為を受け入れなければならぬであろう。相手の行為を受け入れることなく、その〈文〉の〈内容的意味〉に対する応答を表明することは、論理的に不可能だからである。そして、この、相手の行為を受け入れるか否か

の表明こそが、〈文〉がもつ二側面のいま一つ「表現する」という行為自体が表している「こと」（以下、〈行為的意味〉と呼ぶ）に対する応答なのである。

〈内容的意味〉に対する応答は、「はい」系・「いいえ」系・「さあ」系という応答詞の使いわけによって表わされるが、〈行為的意味〉に対する応答の振舞は、これとは異なる。すなわち、次に示すように、「おい。」「もしもし。」「のような〈行為的意味〉のみをもち〈内容的意味〉をもたない文に対する応答（要するに、〈行為的意味〉のみに対する応答）においては、応答詞の使いわけによる意味の区別が認められず、「はい」系の応答のみが可能となり、「いいえ」系・「さあ」系の応答は不可となる。

(6) a 「おい」「はい」「湯に入つてこい」「お湯はきらいだ」(≡2a)

b 「もしもし」「はい」。あれっ、今どこ？」「中国です。携帯電話からかけてます」(『読売』)

(7) a 「おい」「*いいえ／*さあ」(≡6aを改変)

b 「もしもし」「*いいえ／*さあ」(≡6bを改変)

いま、〈行為的意味〉を受け入れることを〈受容〉と呼べば、〈行為的意味〉のみに対する応答における〈受容〉の表明は「はい」系の応答によつてのみ表わされる、と記述できる。なお、その一方で、〈行為的意味〉を〈受容〉しないことを表明する場合には、相手の発話に対して一切の応答を行なわない（相手の発話を無視したり、話題を逸らしたりする）他はない。

以上、応答詞による応答が、〈行為的意味〉および〈内容的意味〉という、〈文〉がもつ二側面のそれぞれに対して

行なわれるものであることを述べたが、「相手の行為を受け入れることなく、その〈文〉の〈内容的意味〉に対する応答を表明することは、論理的に不可能」であることから、応答詞による応答としてあり得るのは、次の二つということになる。

(8) a 〈行為的意味〉のみに対する応答を表明する場合

b 〈行為的意味〉と〈内容的意味〉との両方に対する応答を表明する場合

(8 a) とは (2 a || 6 a) (6 b) のようなものであり、(8 b) とは (1 a · b) (3 a ∨ c) (5 a ∨ d) のようなものである——(2 b) のような、言語表現を伴わない行為に対する応答については、後述する——。また、〈行為的意味〉を〈受容〉しないことの表明が相手の発話に対して一切の応答を行なわないことによつてなされるのに対して、(8 b) における、〈行為的意味〉を〈受容〉することの表明は、「はい」「いいえ」「さあ」といった応答の発話を行なうこと自体によつてなされると考えられる。(8 a) を「二類」と呼び、(8 b) を「二類」と呼んだうえで、これまで述べていたことを整理すれば、応答詞による応答の体系は、次のようになる。

応答の対象		応答詞の使いわけ		
一類	〈行為的意味〉のみ	応答詞の使いわけなし（「はい」系のみ可能）		
二類	〈行為的意味〉（※）と 〈内容的意味〉との両方	〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有している場合		「はい」系
		〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有していない場合	〈内容的意味〉に対する〈不同意〉を表わす場合	
			〈内容的意味〉に対する〈不同意〉を表わす場合	「いいえ」系
				「さあ」系

（※）二類における〈行為的意味〉の〈受容〉は、応答の発語を行なうこと自体によってなされる。

以下では、右の整理に基づき、呼掛に対して行なわれる応答詞による応答について考察する。なお、以下の論述において「応答」と記すとき、それは「応答詞による応答」を指すものとする。

四 呼掛の機能と体系

拙稿（二〇一五）は「太郎。」「その人。」のような名詞による呼掛について論じ、拙稿（二〇一六）は「おい。」「ほら。」のような呼掛詞^⑤による呼掛について論じた。本節では、呼掛の機能と体系について、拙稿（二〇一五・二〇一六）の内容を整理して示す。

呼掛は、大きく、呼掛詞による呼掛と名詞による呼掛との二つにわけられる。

前者、呼掛詞による呼掛は、さらに、「我」―〈汝〉の言語場を構成する^⑥（以下、「言語場構成」とする）機能のみをもつ「典型的な呼掛詞」である「第一種呼掛詞」と、「言語場構成」機能のうえに、「指示」「気付け・思い出させ」「促し」という機能が加わった「周辺のな呼掛詞」である「第二種呼掛詞」とにわけられる。なお、第一種呼掛

詞としては、「あの」「おい」「おう」「すみません」「ちょっと」「なあ」「ねえ」「のう」「もし」「やあ」「やい」「よう」が、第二種呼掛詞としては、「いざ」「さあ」「そら」「それ」「はい」「へい」「ほい」「ほら」「ほれ」が、それぞれ挙げられる⁽⁷⁾。

第二種呼掛詞が「言語場構成」機能のうえに加えもつ機能について。第一に、「指示」とは、「キャッチボールをしておりボールを投げ返す際に相手に「そら。」「それ。」といい、傍で泣いている人にハンカチ差し出す際に「ほら。」「ほれ。」というような場合」すなわち「相手に何かを手渡す場合」に使用される「ソ」系の指示詞と関係する「呼掛詞に認められる機能である。ここでは「自分Ⅱ〈我〉の領域を離れて相手Ⅱ〈汝〉の領域に渡るはずのものとして、ボールやハンカチを「指示」している」とする。なお、相手に何かを手渡す際に使用される、「ソ」系指示詞との関係をもたない呼掛詞「はい」「へい」「ほい」の機能については、「指示」に準じるものとする⁽⁸⁾。第二に、「気付かせ・思い出させ」とは、田窪・金水（一九九七）が、「ほら、オリオンが見えるよ。」「ほら、同じクラスに、吉田っていただろう。」「ほら、答が違ふよ。よく考えてごらん。」という例を挙げて、「話し手にとってはすでに登録済みの情報を聞き手に気付かせたり思い出させたりする機能を持つ」と指摘したものである。第三に、「促し」とは、「それ、行け。」「ほら、早く問題を解きなさい。」「いざ、行こう。」「さあ、走れ。」のような例にみられる「相手Ⅱ〈汝〉に何らかの行為を促す」機能である。なお、「はい、早く問題を解きなさい。」のような、命令・勧誘の表現とともに用いられる「はい」の機能は、「促し」に準じるものとする。

後者、名詞による呼掛は、「太郎。」「かあさん。」「社長。」「先生。」「君。」「母よ。」「お医者さん。」「そこの人。」のようなものであり、「言語場構成」機能に加えて「個性」⁽⁹⁾をもつものとしての対象の指定「機能をもつ。呼掛詞が対象的意味を積極的に欠如した態勢においてもものに対して、名詞は対象的意味を自らにおいてもつため、名詞によ

る呼掛は、呼掛の対象を指定する機能をもつのである。

右に述べた呼掛の機能・体系は、次のように整理される⁽¹⁰⁾。

- ・ 第一種呼掛詞による呼掛 …… 言語場構成
 - ・ 第二種呼掛詞による呼掛 …… 言語場構成 + 指示／気付け・思い出させ／促し
 - ・ 名詞による呼掛 …… 言語場構成 + 〈個性〉をもつものとしての対象の指定
- 以下、これに基づき、呼掛に対する応答について考察する。

五 呼掛詞による呼掛に対する応答

五―一 第一種呼掛詞による呼掛に対する応答

先に、〈行為的意味〉のみをもつ文に対する応答の例として(6a・b)および(7a・b)を挙げたが、改めて考えてみるに、これら「おい。」「もしもし。」に対する応答とは、すなわち、第一種呼掛詞による呼掛に対する応答である。第一種呼掛詞による呼掛は、「言語場構成」という〈行為的意味〉のみをもち、〈内容的意味〉をもたない。そのため、第一種呼掛詞による呼掛に対しては、三節に示した表の「二類」の応答が行なわれることになるのである。また、その〈行為的意味〉を〈受容〉しないことの表明は、その呼掛に対して一切の応答を行なわないことによつてなされる。

さらに、言語表現を伴わない行為ではあるが、ドアのノックおよびインターホンや電話での呼出に対する応答についても、次に示すように、(6a・b)および(7a・b)、すなわち第一種呼掛詞による呼掛に対する応答と同様の、「はい」系の応答のみが可能となり「いいえ」系・「さあ」系の応答は不可となる、という振舞がみられる。

(9) a 次郎は、考える余裕もなく、すぐ第五室に行って戸をノックした。「はあい。」にぶい大河の返事がきこえた。(||2b)

b 元木は玄関の前にしばらく佇んだ後、意を決したようにベルを鳴らした。三十秒ほど過ぎても、応答がない。元木はもう一回ベルを鳴らした。今度はインターホンの受話器を取り上げる音がし、「はい」という女性の声が聞こえた。(『過去』)

c (電話のベルが鳴り、受話器を取って) はい 捜査一課 (『クレ』)

(10) a 次郎は、考える余裕もなく、すぐ第五室に行って戸をノックした。「*いいえ/*さあ。」にぶい大河の返事がきこえた。(||9aを改変)

b 元木は玄関の前にしばらく佇んだ後、意を決したようにベルを鳴らした。三十秒ほど過ぎても、応答がない。元木はもう一回ベルを鳴らした。今度はインターホンの受話器を取り上げる音がし、「*いいえ/*さあ」という女性の声が聞こえた。(||9bを改変)

c (電話のベルが鳴り、受話器を取って) *いいえ/*さあ 捜査一課 (||9cを改変)

また、そのノックや呼出に応じない場合には、一切の応答を行なわない(居留守を使う)他はない。第一種呼掛詞による呼掛は(行為的意味)のみをもつものであり、ノックや呼出は他ならぬ「行為」そのものである。かかる性質の相似ゆえに、これらに対する応答の振舞は、一致するのである⁽¹¹⁾。

五―二 第二種呼掛詞による呼掛に対する応答

第一種呼掛詞による呼掛に対しては、「はい」系の応答のみが可能となり、「いいえ」系・「さあ」系の応答は不可となるが、第二種呼掛詞による呼掛に対しては、次のように、これらすべての応答が可能となる。

(11) a (結夏が光生に鍵を手渡す場面で)「はい」結夏にさらに言われて光生は葛藤がありながらも、はい、と受け取って自分のポケットにしまった。(『最高』)

b 「やあ、いけない、空がくもつて来ますよ。」とヨハンネスはいいました。「ほら、むくむく、きみのわるい雲がでて来ましたよ。」「いんや。」と、旅なかまはいいました。「あれは雲ではない。山さ。どうしてりっぱな大山さ。のぼると雲よりもたかくなって、澄んだ空気のなかに立つことになる。そこへいくと、どんなにすばらしいか。あしたは、もうずいぶんとおい世界に行っていることになるよ。」「(旅な)」

c 「ほらほら、なにがほしいか言ってみてよ」「うーん、いきなり言われてもなあ。ほしいとなればゲームソフト……はプレゼントっぽくないし……」散々悩んだ結果、財布ということで落ち着いた。(『うさ』)

つまり、第二種呼掛詞による呼掛に対する応答には応答詞の使いわけが認められるのであり、三節に示した表の「二類」の応答が行なわれていることになる。そしてこれは、第二種呼掛詞による呼掛が〈行為的意味〉と〈内容的意味〉との両方をもつ、ということを示している。第二種呼掛詞による呼掛における〈行為的意味〉とは、「言語場構成」および「指示」「気付け・思い出させ」「促し」であり、〈内容的意味〉とは、その「指示」「気付け・思い出させ」「促し」の内容である。なお、その〈内容的意味〉の表わし方には、「さあ。」「そら。」「それ。」「ほら。」「ほ

れ。」のように「ソ」系指示詞によるものと、「いい」「はい」「へい」「ほい。」のように「ソ」系指示詞によらないものとの二つがある。

第二種呼掛詞による呼掛が「言語場構成」機能のうえに加えもつ機能は、「指示」「気付かせ・思い出させ」「促し」の三つにわけられる。しかし、以下にみるように、いずれの場合にあっても、それに対する応答の振舞はすべて同様であり、またその振舞は統一的に解釈することができる。それゆえ、本節では、これら三つの場合をまとめて論じる。ただし、「指示」については、本稿に、次のような微修正を加える——先述のとおり、拙稿(二〇一六)では、「指示」について、自分Ⅱ〈我〉の領域を離れて相手Ⅱ〈汝〉の領域に渡るはずのものとして、「ボール」や「ハンカチ」を、つまりは「もの」を「指示」すると考えた。しかし、〈文〉における〈内容的意味〉とは「こと」である。ここから、「指示」の内容を、その「もの」ではなく、「(自分Ⅱ〈我〉の領域を離れて相手Ⅱ〈汝〉の領域に渡るはずのものとして)その『もの』が存在する」という「こと」だと捉え直したい。

次の(12 a ~ c)は「指示」機能をもつ呼掛に対する応答の例であり、(13 a ~ c)は「気付かせ・思い出させ」機能をもつ呼掛に対する応答の例であり、(14 a ~ c)は「促し」機能をもつ呼掛に対する応答の例である。

(12) a (結夏が光生に鍵を手渡す場面で)「はい」結夏にさらに言われて光生は葛藤がありながらも、はい、と受け取って自分のポケットにしまった。(= 11 a)

b (ヌーヌヌがシェリにパンを渡す場面で)「はい、二枚目のパン、シェリ……」「いや、結構、ヌーヌヌ」「もうお腹いっぱいなの?」「いっぱいなんだ」「(シェ)」

c 「餌をあげるよ、ほら。」「うーん、どうしよう。知らない人から物を貰っちゃいけないってお母さんに言

われているんだ。」

(13) a 「あら、だつて、山にはみんな名前があるものでせう？ あれが富士山だし、あれが長尾山だし、あれが

大室山だし、みんなに名前があるぢやないの。だから、この山はカチカチ山つていふ名前なのよ。ね、ほら、カチ、カチつて音が聞える。」「うん、聞える。しかし、へんだな。いままで、おれはいちども、この山でこんな音を聞いた事が無い。この山で生れて、三十何年かになるけれども、こんな、——」(『お伽』)

b 「やあ、いけない、空がくもつて来ますよ。」とヨハネスはいいました。「ほら、むくむく、きみのわるい雲がでて来ましたよ。」「いんや。」と、旅なかまはいいました。「あれは雲ではない。山さ。どうしてりっぱな大山さ。のぼると雲よりもたくなつて、澄んだ空気のなかに立つことになる。そこへいくと、どんなにすばらしいか。あしたは、もうずいぶんとおい世界に行っていることになるよ。」(『11 b』)

c 「父さん、駅に着いたらお菓子、買つてもいいでしょ？」「お菓子？」「ほら、駅にあるでしょ？ ちつちやいお店がさ」「さあ、どうだったかな」(『秘密』)

(14) a 「はいはい、いつまでも起きていないで、早く寝なさい。」「はあい。」

b (ワインを飲ませようとする場面で)「さあ、ひと口」「いいえ」シャイラは頑固に首を横に振った。(『ボス』)

c 「ほらほら、なにがほしいか言ってみてよ」「うーん、いきなり言われてもなあ。ほしいとなればゲームソフト……はプレゼントっぽくないし……」散々悩んだ結果、財布ということで落ち着いた。(『11 c』)

まず、(12 a) (13 a) (14 a) における「はい」系の応答は、それぞれ、「呼掛の主体の領域を離れて応答の主体の領域に渡るはずのものとして」鍵が存在する」という「こと」、「カチ、カチつて音が聞える」という「こと」、「(応答の主体が)

応答詞による応答について

寝る」という「こと」への《同意》を表明していると考えられる。次に、(12 b) (13 b) (14 b)における「いいえ」系の応答は、それぞれ、「(呼掛の主体の領域を離れて応答の主体の領域に渡るものとして) 二枚目のパンが存在する」という「こと」、「きみのわるい雲がでて来た」という「こと」、「(応答の主体が) ワインを飲む」という「こと」への《不同意》を表明していると考えられる。そして、(12 c) (13 c) (14 c)における「さあ」系の応答は、応答の主体が、それぞれ、「(呼掛の主体の領域を離れて応答の主体の領域に渡るはずのものとして) 飴が存在するかどうか」「駅にちっちゃいお店があるかどうか」「(応答の主体が) なにがほしいかを言うかどうか」という情報を今現在所有していない(「知らない、わかっていない、覚えていない」ことを表明していると考えられる。

六 名詞による呼掛に対する応答

拙稿(二〇二五)は、呼掛に使用される名詞を「第一種名詞」「第二種名詞」「第三種名詞」「第四種名詞」の四つに分類した。第一種名詞とは、「言語場構成以前に、予め独自に《個性》をもち、かつ、言語場における《我》―《汝》の構造をとり得る名詞」であり、「山田」「太郎」のような「固有名」がこれに当る。第二種名詞とは、「言語場構成以前に、予め《呼掛主体》との関係によって《個性》をもち、かつ、言語場における《我》―《汝》の構造をとり得る名詞」であり、「かあさん」「にいさん」のような「親族呼称」、「社長」「教頭」のような「役職名」、「先生」「陛下」のような「敬称」がこれに当る。第三種名詞とは、「言語場における《我》」の位置にあることによって、《個性》をもつ名詞」であり、「あなた」「君」のような「人称名」がこれに当る。第四種名詞とは、「《個性》をもたない名詞」であり、「母」「兄」のような「親族名称」、「教師」「医者」のような「職業名」、「人」「女」のような「概念名」がこれに当る。なお、第四種名詞の下位分類は便宜的なものであり、「親族名称」「職業名」は、ともに

「概念名」の一種とみられる。以上は次のように整理される¹²⁾。

・ 第一種名詞 …… 固有名

・ 第二種名詞 …… 親族呼称・役職名・敬称

・ 第三種名詞 …… 人称名

・ 第四種名詞 …… 概念のみを表わす、〈個性〉をもたない名詞

さて、名詞による呼掛は〈行為的意味〉——「言語場構成」および「〈個性〉をもつものとしての対象の指定」——と〈内容的意味〉——その「指定」の内容——との両方をもつものであり、それゆえに、これに対しては、三節に示した表の「二類」の応答が行なわれるが、第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛と第三種名詞による呼掛とは、その〈内容的意味〉の性質が大きく異なっている。前者の呼掛が、呼掛の対象の名前や属性を明らかにするものであるのに対して、後者の呼掛は、呼掛の対象の名前や属性を明らかにせず、その対象を〈汝〉として位置づけるものである。ここから、前者の呼掛の〈内容的意味〉とは、「呼掛の対象（あなた）は」という名前・属性をもつ」という「こと」であり、後者の呼掛の〈内容的意味〉とは、「呼掛の対象（あなた）は〈汝〉である」という（同語反復的な）「こと」であると考えられる。そして、応答の主体は、前者の呼掛の〈内容的意味〉に対しては、自分のもつ名前や属性がその指定の内容と合致している場合には〈同意〉し、合致していない場合には〈不同意〉することができるが、後者の呼掛の〈内容的意味〉——〈汝〉としての指定——に対しては、言語場の構成上、応答を行なうとすれば、〈同意〉以外の選択肢がそもそも存在せず、〈不同意〉し得ない。かかる相違ゆえに、名詞による呼掛に対する応答については、これを、第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛に対する応答と第三種名詞による呼掛に対する応答とにわけて、以下、考察を行なう。

六― 第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛に対する応答

第一に、「はい」系の応答について。(15) は第一種名詞による呼掛に対する応答の例であり、(16 a～c) は第二種名詞による呼掛に対する応答の例であり、(17 a～c) は第四種名詞による呼掛に対する応答の例である。

(15) 「与八」「はい」(『大菩』)

(16) a その時分、締めきった障子の外で、「おばさん」「はいはい」「花を持って来たよ、これをおばさんの店で売るといいや、院代さんにことわってうる抜いて来たんだよ」内では見えないが、障子の外に立ってこういいながら、胸一ぱいに秋草を抱え込んでゐるのは、宇治山田の米友であります。(『大菩』)

b 「機長」帆村が上を向いて叫んだ。「おう」山岸中尉が答える。(『宇宙』)

c (生徒たちが先生を迎える場面で)「先生」「先生」「おう、どうしたんだ」(『積木』)

(17) a 「妹よ」「はい、お姉様」(『ファ』)

b 「駕籠屋さん」「はい」(『おせ』)

c いらいらしていた男妾の浅吉は、やがて声を低くして、「お嬢さん——」と、お雪のことを呼びました。

「はい」(『大菩』)

これらは、「呼掛の対象(あなた)は『与八／おばさん／機長／先生／妹／駕籠屋／お嬢さん』という名前・属性をもつ」という〈内容的意味〉に対する〈同意〉を表明していると考えられる。

第二に、「いいえ」系の応答について。第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛に対する「いいえ」系の

応答は、呼掛の主体による指定の内容が、応答の主体のもつ名前や属性と異なっている場合に成立するものである。すなわち、たとえば「山田」という苗字をもつ自分に対して相手が「田中」という呼掛を行なうなど、相手が誤った呼掛を行なった場合である。無論、勘違いからそのような誤った呼掛が行なわれることもあるが、それは決して多くはない。また、我々は普通、相手の名前や属性を把握していない場合には、第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛ではなく、「ねえ。」や「君。」のように、第一種呼掛詞による呼掛や第三種名詞による呼掛を行なう。それゆえに、第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛に対する「いいえ」系の応答は、論理的には可能であるものの、実際にはほとんど観察されない。

第三に、「さあ」系の応答について。第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛に対する「さあ」系の応答は、応答の主体が、自身のもつ名前や属性についての情報を今現在所有していないという特殊な状況において成立するものである。具体的にいえば、改姓や改名、結婚や離婚、人事異動や転職などによる一時的な混乱の期間や、応答の主体が記憶喪失に陥り、自身の名前や属性に関する情報を忘失してしまった場合などである。それゆえに、第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛に対する「さあ」系の応答は、「いいえ」系の応答同様、論理的には可能であるものの、実際にはほとんど観察されない。

六―二 第三種名詞による呼掛に対する応答

第三種名詞による呼掛に対しては、次に示すように、「はい」系の応答のみが可能となり、「いいえ」系・「さあ」系の応答は不可となる。

(18) a 「君」「ええ」「ハンケチはないか」(『二百』)

b 「君」「*いいえ/*さあ」(≡ 18 a を改変)

そして、このように「いいえ」系・「さあ」系の応答が不可となるのは、既述のとおり、第三種名詞による呼掛の〈内容的意味〉——〈汝〉としての指定——に対しては、言語場の構成上、応答を行なうとすれば、〈同意〉以外の選択肢がそもそも存在しないからである¹³⁾。

七 ま と め

〈文〉には、〈行為的意味〉と〈内容的意味〉との二つの側面がある。応答詞による応答は、これら二側面のそれぞれに対して行なわれ、〈行為的意味〉のみに対する応答を表明する場合(一類)と、〈行為的意味〉と〈内容的意味〉との両方に対する応答を表明する場合(二類)とに大別される。一類の応答においては、応答詞の使いわけがなされず、「はい」系の応答のみが可能となる。これに対して、二類の応答においては、応答の発話を行なうこと自体によって〈行為的意味〉に対する〈受容〉が表明され、〈内容的意味〉をめぐる応答詞の使いわけがなされる。すなわち、〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有しており、〈内容的意味〉に対する〈同意〉を表わす場合には「はい」系の応答が行なわれ、〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有しており、〈内容的意味〉に対する〈不同意〉を表わす場合には「いいえ」系の応答が行なわれ、〈内容的意味〉について応答の主体が必要な情報を今現在所有していない場合には「さあ」系の応答が行なわれる。

呼掛は、呼掛詞による呼掛と名詞による呼掛とに大別され、前者はさらに、第一種呼掛詞による呼掛と第二種呼掛

詞による呼掛とにわけられる。第一種呼掛詞による呼掛に対しては一類の応答が行なわれ、第二種呼掛詞による呼掛・名詞による呼掛に対しては二類の応答が行なわれる。名詞による呼掛に対する応答について、呼掛に使用される名詞は、第一種名詞・第二種名詞・第三種名詞・第四種名詞の四つにわけられるが、第一種名詞・第二種名詞・第四種名詞による呼掛に対しては、論理的には「はい」系・「いいえ」系・「さあ」系の応答のすべてが可能であるものの、「いいえ」系・「さあ」系の応答は実際にはほとんど観察されず、第三種名詞による呼掛に対しては、「はい」系の応答のみが可能となり、「いいえ」系・「さあ」系の応答は不可となる。それぞれの呼掛に対する応答の、かかる振舞の相違は、それぞれの呼掛における〈内容的意味〉の、有無および性質の相違によるものである。

以上、従来の研究とは異なる観点から応答詞による応答の分析を行なううえで、呼掛に対する応答の場合について論じた。今後は、疑問文などに対する応答についても分析を進めていきたい。

註(1) 『日本語大事典』の「感嘆詞」の項(佐藤琢三氏執筆)。

(2) 用例の出典は、稿末の略記に従って示す。なお、出典を記載していない用例は、作例である。

(3) ここに示す応答詞は、その変異形をも含んだものである。すなわち、本稿において「はい」「いや」などというとき、それは「はあい」「はいはい」や「いやあ」「いやいや」といった変異形をも含んでいる、ということである。また、たとえば、「はい」は呼掛や掛声としても使用され(拙稿(二〇一六)および拙稿(二〇一七)も参照)、「はて」は感動の表出としても使用されるなど、ここに挙げた語類は、「応答」以外にも使用されることがある。だが、ここに挙げた語類はすべて応答に使用可能なものであるため、本稿では、応答詞として扱う。なお、たとえば、「おう」は基本的に目上の者が目下の者に対して使用し、その使用者としては男性が想定されやすい、というように、個々の応答詞は、それぞれに独自の用法をもつ。応答詞による応答は、言語場において「人」が「人」に対して行なうものであるが、言語場において「人」と「人」とが話し手・聞き手として対峙するとき、そこには、上下・親疎・公私といった待遇の分化や、「人」がも

つ年齢・性別といった属性の分化が発生する。個々の応答詞がもつ独自の用法は、原理的に、かかる待遇・属性の分化から生じるものである（拙稿（二〇一六）も参照）。

- (4) 「同意」「不同意」という用語は、森山・張（二〇〇二）でも用いられているが、相手の「要求」に対する「同意」「不同意」に限られており、本稿とは、その概念規定においても適用範囲においても異なっている。

- (5) 拙稿（二〇一六）は、呼掛に使用される感動詞を、森重（一九五九）に倣って、「呼掛詞」と呼んだ。

- (6) 〈我〉〈汝〉は、ともに、拙稿（二〇一五）による用語である。拙稿（二〇一五）は、呼掛において、広く「話し手」と呼ばれてきたものを、言語場におけるもの（≡〈我〉）と言語場構成以前におけるもの（≡〈呼掛主体〉）とにわけ、同様に、広く「聞き手」と呼ばれてきたものを、言語場におけるもの（≡〈汝〉）と言語場構成以前におけるもの（≡〈呼掛対象〉）とにわけた。

- (7) 応答詞の場合と同じく、ここでは、その変異形も含めて例を挙げている。

- (8) 後述するように、「指示」の機能については、本稿に微修正を加える部分がある。

- (9) 〈個性〉は、名詞による呼掛について、森重（一九五二）が「個性」と呼び、川端（一九六三）が「個性的性格」と呼んだものを、拙稿（二〇一五）がまとめた用語である。

- (10) この整理は、拙稿（二〇一六）における整理を再掲したものである。

- (11) 仁田（一九九七）は、ドアのノックを「非言語的な呼びかけ」と位置づけ、これに対する応答の例を、「呼びかけに応じるもの」としての〈受け応え〉である〈返答〉の一種とする。なお、ドアのノックおよびインターホンや電話での呼出においては、基本的にその行為の主体が誰であるかが明らかではないため、これらの行為に対する応答としては、「はい」系の応答が可能であるとはいっても、「おう」のような、目上の者が目下の者に対して用いる応答詞は使用せず、そのような待遇的性質をもたない「はい」を使用した応答を行なうのが一般的である。

- (12) この整理は、拙稿（二〇一五）における整理を再掲したものである。

- (13) ただし、第三種名詞による呼掛は、目上の者に対しては使用できないという待遇的な制限をもつため、たとえば部下が上司に対して「君。」という呼掛を行なった場合に上司がこれに対して「えっ？」と発話するなど、待遇的な違反があった場合には、〈同意〉が表明されないことがある。

参考文献

大鹿薫久（二〇一四）「文」（佐藤武義・前田富祺（編集代表）『日本語大事典』朝倉書店）

川端善明（一九六三）「喚体と述体——係助詞と助動詞とその層——」『女子大文学（国文篇）』一五・大阪女子大学文学会

金水敏（一九八三）「感動詞」（大曾根章介・他（編）『研究資料日本古典文学 第十二卷 文法 付辞書』明治書院）

定延利之（二〇一四）「応答詞」（佐藤武義・前田富祺（編集代表）『日本語大事典』朝倉書店）

佐藤琢三（二〇一四）「感嘆詞」（佐藤武義・前田富祺（編集代表）『日本語大事典』朝倉書店）

田窪行則・金水敏（一九九七）「応答詞・感動詞の談話的機能」（音声文法研究会（編）『文法と音声』くろしお出版）

仁田義雄（一九九七）「未展開文をめぐる」（川端善明・仁田義雄（編）『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房）

橋本進吉（一九三四）『国語法要説』（『国語科学講座 6 国語法』明治書院／橋本進吉（一九四八）『橋本進吉博士著作集 第二

冊 国語法研究』岩波書店 所収）

森重敏（一九五二）「間投助詞から終止としての係助詞へ」『国語国文』二二—五・京都大学国文学会

森重敏（一九五九）『日本文法通論』風間書房

森山卓郎・張敬茹（二〇〇二）「動作発動の感動詞「さあ」「それ」をめぐる——日中対照的観点も含めて——」（『日本語文法

学会（編）『日本語文法』二—二・くろしお出版）

六城雅章（二〇一五）「名詞による呼掛について——喚体論の視点から——」『日本文藝研究』六七—一・関西学院大学日本文学

会

六城雅章（二〇一六）「呼掛詞による呼掛について」『日本文藝研究』六七—二／六八—一・関西学院大学日本文学会

六城雅章（二〇一七）「掛声について」『日本文藝研究』六九—一・関西学院大学日本文学会

用例出典

『靈魂』Ⅱ海野十三『靈魂第十号の秘密』／『朝日』Ⅱ朝日新聞社『朝日新聞』一九九八年二月九日朝刊（※『聞蔵Ⅱビジュアル』を利用した）／『宮本』Ⅱ吉川英治『宮本武蔵』／『次郎』Ⅱ下村湖人『次郎物語』／『読売』Ⅱ読売新聞社『読売新聞』二〇〇三年九月五日朝刊（※『ヨミダス歴史館』を利用した）／『過去』Ⅱ最上鷹夫『過去からの声』／『クレ』Ⅱ臼井儀人『クレヨンしんちゃん』

応答詞による応答について

ん』一五／『最高』＝坂元裕二・百瀬しのぶ『最高の離婚』下／『旅な』＝ハンス・クリスチャン・アンデルセン（楠山正雄・訳）『旅なかま』／『うさ』＝佐藤了『うさぎロボ』三／『シェ』＝ガブリエル・コレット（加藤民男・訳）『シェリ』／『お伽』＝太宰治『お伽草子』／『秘密』＝ケイト・モートン（青木純子・訳）『秘密』上／『ボス』＝レイ・モーガン（松村和紀子・訳）『ボスにお手上げ』／『大菩』＝中里介山『大菩薩峠』／『宇宙』＝海野十三『宇宙戦隊』／『積木』＝三浦綾子『積木の箱』／『ファ』＝及川博則・木俣冬『ファースト・クラス 2nd season』／『おせ』＝邦枝完二『おせん』／『二百』＝夏目漱石『二百十日』

（ろくじょう つねあき・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程）